# メディア・情報リテラシー育成のための一実践

## ～新聞機能学習に着目して～

東京都立つばさ総合高等学校
主任教諭　玉腰　隆幸

### １　研究の背景

今日の情報化社会において、SNS の拡大や生成 AI の急速な発達は、人々が接する情報の質を大きく変容させた。真偽不明な「フェイクニュース」が政治的混乱や社会的分断を引き起こす事例が増えていることは周知のとおりである。このような状況下で、生徒が情報を批判的に受け取り、吟味し、自らの意見を形成する力＝「メディア・情報リテラシー」[1]を身に付けることは、喫緊の課題である。「高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説　地理歴史編」では、学習活動において「出典を確認し、信頼性を踏まえて資料を活用すること」や「調査・考察の過程を整理し報告すること」の重要性が強調されている。これは、情報化社会において不可欠な批判的思考力を育む営みである。

こうした課題に応える教育実践として注目されるのが、新聞を教材として活用する NIE（Newspaper in Education）である。日本新聞協会による分類では、NIE には「新聞制作学習」「新聞活用学習」「新聞機能学習」の３つの側面があるが、とりわけ「新聞機能学習」は、新聞というメディアが社会的にどのような機能を担い、記事がいかなる編集意図や立場から作られているのかを理解する学習であり、メディア・情報リテラシーの育成に直結する学習活動である。高等学校では新聞を教材にしたメディア・情報リテラシー教育の実践が積み重ねられてきた。例えば新潟県立久比岐高等学校（2019）[2]では、「内閣の年頭会見」を題材に各新聞社の社説を読み比べ、生徒が首相の発言に対する評価や新聞社ごとの立場の違いを比較する授業を行った。これは新聞を「意見の多様性を知る教材」として活用する貴重な実践であり、社説を通じて生徒に批判的視点を育もうとした試みであった。しかし、このような実践は「新聞活用」としての側面に留まりやすく、新聞というメディアそのものがどのような社会的機能を担い、いかなる編集意図に基づいて情報を構成しているのかを理解させるために十分に知見が蓄積されているとは言い難い。尾高（2024）[3]が指摘するように、従来の「新聞機能学習」は記者の仕事紹介や情報産業としての新聞ができるまでを紹介するに留まり、「新聞で学ぶ意義」が十分に伝わっていないという課題がある。

そこで本研究は、高等学校地理歴史科の「歴史総合」の授業において「新聞機能学習」に焦点をあてた実践を行い、原発処理水問題に関する新聞の論調比較に加え、関東大震災時に発生した流言蜚語という歴史的事例を検討することによって、メディアの役割と構造を理解させることを試みる。また新聞活用を通した「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図り、そこで養われたリテラシーを、SNS やその他メディアの情報にも応用できる力へと発展させることを目指す。

## ２　生徒の実態

本実践は、2023 年度に稿者の前任校である東京都立墨田川高等学校で、１年次生（319 名）に対して必履修科目「歴史総合」の授業で実施したものである。年度当初に行ったアンケート(回答者 319 名)では、新聞購読率は 23%、「普段あなたは何から情報を得ていますか（複数回答可)」の質問に対して、①インターネット・SNS（274 名）②テレビ（273 名）③新聞（24 名）④ラジオ（16 名）⑤雑誌（14 名）という回答があり、新聞から情報を得ている生徒はわずか７％であることが分かった。また「新聞を読むことにどのようなメリットがあると思いますか（複数回答可)」の質問に対しては、①「文章を読む能力が向上する（240 名)」②「世の中のことを知ることができる（229 名)」③「社会問題を考える力が向上する（177 名)」④「文章を書く力が向上する（58 名)」⑤「メリットがあるか判断できない（17 名)」⑥「その他（語彙力の向上、興味のない情報の収集など)（7 名）という回答があった。これらの傾向は、生徒が新聞を単に「文章を読む教材」「情報の供給源」として認識しており、新聞というメディアが社会的・政治的に果たす役割や、報道の構造を読み解く視点を十分に持っていないことを示している。つまり、新聞を情報の受信に限定的に捉えており､メディアを読み解く主体としての批判的視点が形成されていないと言える。新聞がいかに情報を取捨選択し、どのような視点から社会を描いているのかといった点に注目する学習活動＝「新聞機能学習」を通じて、メディア・情報リテラシーの基礎を培うことが求められる。

## ３　実践の概要

### (1)　「いっしょに読もう！新聞コンクール」と原発処理水問題（７月）

夏季休業中の課題として日本新聞協会の実施する「いっしょに読もう！新聞コンクール」に作品を提出することを計画した。その理由は、記事を自分で選び、選んだ理由と自分の考えをまとめた後、その記事を他者に読んでもらい、内容について対話し、話し合った後の自己の考えを再構築するという過程が、「主体的・対話的で深い学び」を実現することに繋がると考えたからである。コンクール作品制作の練習として、稿者が選んだ「原発処理水の海洋放出」の記事を読み、自分の意見を表現する活動を行った。生徒には気づかれないように座席列ごとに異なるワークシートを配布し、記事に対して自分の意見をまとめ、隣同士でペアになって共有した。使用した新聞記事、その記事を読んだ生徒の代表的な感想は以下の通りである。

【ワークシートＡ　「お墨付きに国内外反発」　『毎日新聞』　2023 年７月５日付】

| |
|---|
| 〈Ａを読んだ生徒の感想〉2015 年に「関係者の理解なしにはいかなる処理も行わない」と約束したのにも拘わらず、今頃になって海洋放出するのはおかしい。放出すれば外国が輸入規制すると言っているため、食品関係者の意見を踏まえて考慮すべきだと思う。 |

【ワークシートＢ　「処理水対策高評価」　『読売新聞』　2023 年７月５日付】

| |
|---|
| 〈Ｂを読んだ生徒の感想〉万が一の事態が起こっても大丈夫なように、準備を重ねてから排出するのが良い。トリチウムは毒性も弱く、薄められて排出され、また IAEA も対策に高い評価を示しているなど信用性も高いので排出には賛成だ。 |

意見を共有する中で、生徒はそれぞれ異なった記事を読んだことに気づき、同じ「原発処理水の海洋放出」の問題であっても、新聞各社に論調の違いがあり、自分が読んだ文章にいかに左右されてしまうのかなど、読み比べをすることの意義を実感した。また一人一台端末を活用して、経済産業省などのＨＰからＡＬＰＳ処理水やトリチウムについて一次資料にあたって知識を獲得し、この問題について主体的に判断しようとする生徒も見受けられた。

（写真１：隣同士ペアとなり、感想を共有）

（写真２：一次資料にあたる生徒）

共有後の生徒の感想には、科学的安全性と漁業者への風評被害といった要素を多面的・多角的に思考し、この問題を捉えたものが多かった。生徒は、新聞記事がもつ編集意図や立場の違いに気づき､さらに他者の意見を手がかりに自らの理解を修正･深化させていた。このことから、新聞を通じて得られた情報を批判的に吟味し、追加の情報収集を経て自己の意見を形成するという「新聞機能学習」のプロセスを経験し、メディア・情報リテラシーを高めることができたと考えられる。

〈情報を共有した後の生徒の感想〉科学的に安全か否かということだけを考えていて、人間の心理的なことにまで考えが及ばなかったので､友人の意見を聞いてハッとさせられた。そして人間の心理的な部分も含めたら、処理水の放出による影響はとても大きなものだと感じた。初めは科学的に安全ならば放出しても大丈夫だろうと思っていたが、再度考え直したらこの問題に慎重に向き合う必要があると気づいた。また内容についてよく理解していないで悪いイメージを持っている人や、風評被害をなくすことが重要であると考えた。

夏季休業後には、作成したコンクールの作品をグループで交換して、記事や作者の考察に対してコメントを付箋に記入し、他者の作品を読んで気づいたことや、コメントを受けてさらに考察したことをまとめる振り返りを行った。「人の考えを聞くことは、自身の考えを深めていくうえでとても大切なのだと思う。自分で考え、言語化し、意見を聞いて再びまとめることで、より考えを深めることができる。」や「一つの問題に対して様々な立場の意見を聞き、自分とどう違うのか比較する機会はそれほどない。知識のある・なしで社会の見方も変わってくるので、日々のニュースに耳を傾けたい。」など、新聞コンクールの形式を活用した主体的・対話的で深い学びは、生徒の批判的思考やメディア理解を深化させる効果的な学習手法として有効であったと考えられる。

**(2) ニュースリテラシー出前授業と関東大震災の流言蜚語(12 月)**

尾高(2024)[3]が紹介する取組に関連して､「情報の真偽を見極める力」を養うニュース・リテラシー出前授業を導入した。本授業は新聞記者らが講師として派遣され、ジャーナリズムの本質やメディア・リテラシーの重要性、SNS 利用に潜む危険性について講義いただくものである。特に 2023 年は関東大震災から 100 年にあたる節目であったため、担当記者

との協議を経て「関東大震災時のデマと現代のフェイクニュース」をテーマとした。その事前学習として、歴史総合の授業では知識構成型ジグソー法を活用し、「100 年前の災害から私たちは何を学ぶべきか」をテーマに生徒が自ら考えを表現する活動を行った。

（写真３：ジグソー活動の様子）

（写真４：記者の講演を聞く生徒）

各ワークシートの中には以下の新聞記事を用いて、資料の読みとりを行った。

ワークシート☘【関東大震災はどのような災害だったのか？】　『毎日新聞』
「迫る黒い怪物　関東大震災の死者数の大半が火災だった理由」　2023 年 8 月 25 日付

ワークシート❤【なぜ関東大震災の混乱の中で、朝鮮人を虐殺したのか？】『毎日新聞』
「関東大震災時の虐殺 新聞は「流言」報じた責任 震災前も蔑視の記事／平時から差別許すな」　2023 年 10 月 5 日付

ワークシート♠【なぜ当時の人々はデマを信じてしまったのか？】『大阪朝日新聞号外』
「地震と駿河湾の大海嘯　富士山爆発の変じたものか」　1923 年 9 月 1 日付

ジグソー活動終了後の生徒の感想には、災害時の不安が人々をネガティビティ・バイアスや同調バイアスといった認知の偏りに陥らせ、結果としてデマの拡散を助長することになった心理的側面への理解が見られた。また生徒は同時に、ラジオ放送の開始前であったため不確かな情報を含む新聞に頼らざるを得なかったという関東大震災発生当時特有の環境的要因にも目を向けていた。

〈『100 年前の災害から私たちは何を学ぶべきか』に対する生徒の考察〉
①災害時は強い不安からデマが広がることがあるため、正確な情報を見極める必要がある
②情報を鵜呑みにして、自分と異なる思想（社会主義者）や異なる人種（朝鮮人）の人々をひとくくりにして批判せず、潜在的な差別意識をなくすべきだ
③震災の被害が大きくてパニックになると普段信じないことも信じてしまう可能性があるため、日ごろから災害への備えを万全にする

その後に行われた出前授業では、現代のフェイクニュースとして、令和４年台風第 15 号による大雨での水害時に AI の進歩によって生成されたフェイク画像や、コロナ禍でのデマとヘイトクライムなどを解説していただき、生徒は関東大震災のデマは決して他人事ではないと実感した。また情報の受け手としてだけでなく、発信者としてのリテラシーを身に付けることの重要性を理解することができた。

〈出前授業受講後の生徒の感想〉
①自分たちが気をつけなければいけないこととして、今までは受け取る側目線だけで「疑う事」「正しい情報を見分ける事」だけが大事だと思っていたけれど、発信者目線である「不確かな情報を発信しない」ことも大事だと知れ、消すことができないネット上で自分たち一人ひとりの影響力を知ることができた。
②昔から今に至るまで色々な形式で色々なデマが広まっていったけど、いつの時代におい

ても広まる大きな原因は不安や好奇心などだということがわかった。私はこれから先、デマ情報を広めないためにも、メディアリテラシーをもって、不安などに煽られてデマ情報を広めないようにしようと思った。

## ４　成果と課題

本実践では、NIE（Newspaper in Education）の三要素のうち「新聞機能学習」に焦点をあてることで、高校生が新聞を「情報源」として利用するだけでなく、記事の編集意図や社会的役割にまで目を向ける契機をつくることができた。原発処理水の事例では、「同じ事象でも新聞によって論調が異なる。」「自分の考えが記事に左右されていた。」と気づき、情報の背後にあるメディアの機能を意識するようになった。また、意見交換や再考の過程では「他者の視点に触れることで考えを深めることができた。」という声が多く見られ、情報を鵜呑みにせず多面的・多角的に読み解く姿勢が育まれた。さらに、関東大震災の流言蜚語と現代のフェイクニュースを結びつけた出前授業は、生徒に真偽を見極める受け手の責任と同時に不確かな情報を発信しない送り手の責任にも気づかせるものであり、「メディア・情報リテラシー」の本質的理解につながったといえる。

一方で課題として、成果の多くは感想文や発言に基づく定性的評価であり、批判的思考力やメディア・情報リテラシーの伸長を定量的に把握する仕組みが十分に整えることができなかったことが挙げられる。また新聞以外のメディアとの比較や、生徒自身による情報発信を伴う活動は限定的であり、新聞で培ったリテラシーを SNS やその他メディアへ横断的に活用できる力へと発展させる点に課題が残った。加えて単発的な授業実践にとどまり、カリキュラム全体で継続的にリテラシー教育を展開する仕組みが十分でなかった点も改良の余地がある。

情報の真偽をめぐる環境がますます複雑化している現代だからこそ、生徒が「情報を疑い、選び、責任を持って扱う力」を育む教育は急務である。今後は、「新聞活用」「新聞制作」といった既存の NIE の枠組みに加え、「新聞機能学習」を軸とした教材開発を深化させ、社会科教育において体系的かつ持続的なメディア・情報リテラシー教育の実践を構築していきたい。

【註】

（１）UNESCO　Media and Information Literacy: Policy and Strategy Guidelines
https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000225606　　2025 年 8 月 18 日

（２）新聞を活用した教育実践データベース　「教育に新聞を　Newspaper in Education」
https://nie.jp/report/selected/archive/20200128_013347.html　　2025 年 8 月 18 日

（３）尾高　泉（2024）　「民主主義に参加する力を育む－メディアが実践するリテラシー教育－」「情報の科学と技術」74 巻(2024)2 号　P46 - 51

【参考文献】

菅谷明子(2000)　『メディア・リテラシー　－世界の現場から－』　岩波新書

坂本旬・山脇岳志(2022)　『メディアリテラシー　吟味思考を育む（クリティカルシンキング　はぐく）』　時事通信社